

◆ 2023 年度 活動 報告 シ ー ト ◆

団体名：埼玉大学有機農業研究会

26A-24

代表者：代表理事会長 葛西 文二

URL : <http://saitama.eco.coocan.jp/> <https://twitter.com/saidaihozyou>

1. 活動が必要とされた状況

学外の五関新ほ場付近は、都市化の進展に伴い、農地が著しく減少しており、残された耕作地も管理されないため、特定外来生物等（アライグマ、ハクビシン等）が生息し、近年、作物への被害は拡大している。また、雑草等が繁茂したほ場は、ダニ等の病害虫の生息場所となってしまう、近隣住民への健康への影響も懸念される。このため、休耕地を有機農業により栽培活動を行うことにより、自然循環メカニズムを活かし、人間と生物が共生し、いのち響き合う場を創るとともに、市民と農家と学生が交流し、自然や環境、地域社会のあり方を学ぶ場を提供する必要がある。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

2023 年度から栽培を始めた五関新ほ場は、長期間耕作されなかった田んぼであるため、マメ科の緑肥作物（白・赤クロバー、ヘアリーベッチ）を栽培し、土壌改良を図るとともに、農業機械・農具等を格納するための農具小屋を設置する等の栽培体制の整備を行った。また、並行して、小麦、大豆を中心に栽培するとともに、里芋、イチゴも有機農法により栽培した（4月～2月の間、週1～2回、学生3名、社会人2名）。

3. 活動の成果

小麦は6月に多く収穫でき、その種子を12月に播種し、現在栽培している。大豆は、夏の猛暑と少雨による発芽不良に見舞われたが、枝豆を収穫できた。ただ、その後、カメムシ、ハスモンヨトウの食害により、収量が少なく、品質も悪くなった。しかし、ほ場の土質は、ほ場の北側を中心に畑作に向く状態に改善され、雑草が繁茂するような状態はなく、益虫が生息し、鳥も見られる。学生は、休耕地をほ場化し、有機野菜を作るための基盤を整備する経験を通じ、自然の豊かさ、有機農業の素晴らしさを体験できた。



小麦の栽培



大豆の脱穀

4. 今後に残された課題

鴨川ほ場からの移転に伴い、農具小屋作り、土壌改良等の栽培体制の整備に時間を要し、人手不足もあるため、本格的な有機農法による栽培ができなかった。また、大豆等の育苗不良、害虫の発生、夏の高温等が原因で生育状況が悪かったことは、有機農法に関する知見・経験を積み重ねる必要がある、作物管理や人手の確保をどのように行うかが課題である。この点を解決するためにも、社会人OBや近隣住民に栽培活動に参加してもらえる仕組みを構築していく必要がある。